

## 「ヨハネ福音書 20 章 11～18 節における 『振り向く』に着目した実践研究に関する一考察」

新井 美穂

### 1 はじめに—「説得より納得を」

子どもたちの発想で聖書を読むとどのような理解に至るのか、子どもたちはどのように考えるのかをキリスト教の核心である復活に焦点を当て検証したい。それが本稿の中心的課題である。

大田は、教育の主体について「説得より納得を<sup>1</sup>」という一言で発想の変換を示す。つまり、従来の教育は教師が教える事が中心であり、それは教師の一方的な説得あるいは知識の提供であり、ともすれば同化の強制になりかねない一面があったが、そうではなくて生徒が納得する教育が必要であるという。この言葉は、教育について語る際の主語を教師から生徒に変換させる事で、教育の主体は教師ではなく生徒である事を明確にする<sup>2</sup>。教育の目的は、人を教える事にあるのではなく、人は自ら学び育つ存在という一面もあり、学ぶ側に立った発想で教育の目的を捉え直していく必要が示されているように思われる。

教師は教えるのが当然と教師も生徒も親も世間一般も考える中で、佐々木は「教師は教えるプロではなく、教わるプロであること<sup>3</sup>」という言葉で教師の役割を「教える」から「学ぶ」と変換させて教育の本質に迫る。このように二人に共通する事は、教育の主体を問い直す「脱教える発想」が根底にある所だと思われる。

そこで今回は、ヨハネ福音書 20 : 11～18 の

復活の場面におけるイエスとマグダラのマリアの位置関係に着目する事とした。まず、当該個所に関する伝統的理解は、特に「ノリ・メ・タンゲレ」と題する絵画<sup>4</sup>を見るとわかるが、イエスとマリアが「向き合っている」構図で描かれる場合が多い。

しかし、ヨハネ福音書が記すイエスとマグダラのマリアの出会いの場面では、マリアが「振り向く」(strepho) という動作が 20 : 14、16 と 2 回出て来る。聖書を記述通り読むと絵画に描かれている伝統的な立ち位置である「向き合う」イエスとマリアにならない。振り向く 1 回目の動作でイエスとマリアは向き合う。そこから更に 2 回目の振り向く動作になると、マリアとイエスは向き合えないのである。相手が主イエスだと認識し、向き合っている主イエスを前にしながらマリアはわざわざ自分の向きを変えるのである。

そこで、この聖書本来の記述にはどんな意味があるのか、伝統的理解以外の解釈について子どもたちと考えた。そのプロセスと結果を論じるにあたり、本稿ではまず始めにヨハネ福音書 20 章 11 節より 18 節について「振り向く」(strepho) という語に着目している見解はどのようなものがあるか、当該箇所での聖書学的理解について概観する。それを踏まえ、実際に授業でのプロセスとその中で出て来た小学校 3 年生の意見を提示し、子どもたちの聖書理解のユ

ニークさ一単純素朴にして深く直感的神学的意見一に迫り記録としたい。その上で教師の役割に必要な事を考察したい。

## 2 20章 14・16節に見られる「振り向く」に関する理解

### (1) 語釈的理解

新約聖書の中で「振り向く」(strepho)は、21回用いられ、ルカ福音書に7回、使徒言行録に3回、マタイ福音書に6回、ヨハネ福音書に4回、黙示録に1回である。能動態での使用は4回で、その内3回が他動詞であり、ルカ文書では受動態が基本用いられ、常にイエスを主語として使用され、この言葉に続いて出て来る言葉や行動を強調する働きがあるとされている<sup>5</sup>。更に、「文頭として用いられる例として、ヨハネ1:38ではイエスについて(＜振り返る＞。定動詞としては20:14でマリアに対し)、また20:16ではマリアの新しい動作として(17節のイエスの拒否から見て)、＜彼の方に歩みよって＞<かけよって＞の意。」<sup>6</sup>とある。

つまり、この言葉は主にイエスの行動を表している単語で、ヨハネ福音書の当該箇所におけるイエス以外の使用は珍しい事例である。故にこの事典は、このヨハネでのマリアの行動を表す(strepho)について単なる辞書的意味の「振り返る」ではなく、マリアがイエスの方に「歩み寄らないし駆け寄った」の意味だ、とあえて解釈を論じている。

次に、岩隈編纂の辞書は、この20:14の(strepho)の受動態は再帰的意味だとし、「ヨハネ20:14と16と同じ動詞がある。この間に墓の方に向いていたのか、<sup>7</sup>『彼をそれと知って』

とするシリヤ訳があり、ここはその意味のアラム語の誤読であろうとブラックは言う<sup>8</sup>」との説明を入れている。岩隈のこの説明もまた20:14、16の2回「振り向く」が、イエスとマリアの立ち位置について考える際に違和感を覚えている証左と言えるのではないか。

ここで確認したい事は、復活自体が不可解であるばかりでなく、マリアが2回振り返る行動が既に不可解であり、違和感を覚える行動という事である。

### (2) 聖書学的理解

・黒崎幸吉<sup>9</sup> (1934年)

黒崎は特段マリアの振り向く行動に関心は示さない。むしろ地上におけるイエスとの交わりを求めるマリアに関心を持つ。「イエスの興へんとし給ふものは、父の御許に昇り給ひしイエス、即ち父の御許より聖霊を賜はり聖霊によりて彼を信ずるものの中に永遠に留まり給ふイエスとの交わりである事を示す。故に父の御許に昇り給はざる現在のイエスとの交わりを持ち続けん事を欲するマリアの態度を斥け給ふた。」<sup>10</sup>とあり、イエスが与えてくださろうとするものに思いが及ばず、自分中心の考えで心が溢れているマリアを黒崎は見出す。

・バルバロ<sup>11</sup> (1967年)

バルバロは16節の注解で「かの知らない人は自分の願いに直接答えないので、マリアは相手にせず、再び墓の方を向きなおって、いままでどおりにそのことばかりを悲しみ続けている。その時イエズスはアラマイ語で彼女を呼ぶ。」<sup>12</sup>と記し、3回振り向くマリアと解釈して

いる。更に 18 節の解釈では、マリアは「apostola apostolorum」（使徒の使徒）であり、従順に直ちにイエスの命令を果たす。<sup>13</sup>と述べ、バルバロはマリアをイエスの復活の証人や告知者や弟子としてだけではなく、「使徒」と捉えている。<sup>14</sup>

・パークレー<sup>15</sup>（The Daily Study Bible 1983 年）

パークレーは、何故マリアはイエスに気づかなかったかという事について以下のように考える。一つ目は「私たちの悲しみは本質的にわがまま<sup>16</sup>」だからと言う。即ち、マリアはイエスのため、それも神の栄光を表す故に十字架に死んだイエスの為に悲しんでいるのではなく、愛する人を失った自分の為に悲しむのでイエスが分からないと捉える。2つ目は「マリヤは間違った方向に固執していたから、イエスを認める事ができなかった。彼女は墓から目をはなすことができず、イエスに背を向けていた。<sup>17</sup>」と記す。それは、マリアが自分を憐れみ、悲しみや絶望や死の闇の中に身を沈め、復活という、絶望や死の彼方の命、光、希望に目を向けようとしないので、イエスと向き合いながらイエスが見えていないという。しかもパークレーは「番人と勘違いした人に答えるとすぐ、彼女は墓の方を向いてしまったに違いない<sup>18</sup>」と聖書にはないマリアの行動を推測する。それを根拠にマリアが墓に象徴される絶望と死の世界にこだわる姿を描き出す<sup>19</sup>。よってパークレーは、聖書に記されていない振り返りを想像しもう一度墓をマリアは見つめ、しかしイエスの呼びかけで 3 回目振り返りの行動をとって墓という絶望を背にし、命の徴であるイエスと向き合うとこの場

面を考えている。パークレーの描くマリアの「振り向く」行動は 3 回という事になる。

・シュラッター<sup>20</sup>（1984 年）

シュラッターは振り向くに関しての発言はしていない。

・シュルツ<sup>21</sup>（1986 年）

シュルツによれば、振り向いてイエスを見てもイエスと理解できないマリアは、エマオ途上（ルカ 24:16）同様「目をくらまされている者」あるいは「信仰の認識に到達していない者」である。故に復活のキリストはマリアの名前を呼んで自分に気づかせ、キリストに気づいたマリアはイエスを「先生」と呼ぶ事で、ヨハネの読者に「教える者」としての復活のキリストを伝えつつ、17 節以下を記す事で、そのキリストは高挙のキリストであり、それがこの物語の眼目であると理解している。つまりここではマリアが振り向くという行動には特別に意味を見いだしていない。

・高橋三郎<sup>22</sup>（1990 年）

高橋は著書の中で塚本訳聖書を引用している。塚本訳の 20:16 は訳者自身の敷衍的説明として「こう言って、また墓の方を向いている<sup>23</sup>」との言葉があり、それを高橋は用いている。つまりマリアの振り向く行動を 3 回と考える事に異論はないと思われる。しかし、振り返った行為についての言及はなく、関心を示さない。

・山岡健<sup>24</sup>（1991 年）

「16 節にも彼女は<振り向いて>と書いてあ

るが、2度同じようにイエスが彼女の背後から語りかけているところに特別な意味が隠されているように思われる。マリアが見ている方向とは180度反対の方向にイエスは立っておられる。<sup>25</sup>と山岡は記し、この「背後」が重要だと指摘する。なぜなら、あの方を引き取ると言うマリアは「自己中心的発想を捨てきれないマリア」<sup>26</sup>であり、そのマリアは目の前にイエスを見ても分からない理由を「彼女のイエス理解の延長線上において絶望している」<sup>27</sup>からと山岡は考える。ご復活のキリストはマリアが会いたいと思っている形でのイエスではなく、マリアが自分の考えや思いに固執しているから、目の前にいるイエス御自身をマリアは判別できない。そのマリアの体の立ち位置は、イエスに対するマリアの心の向き、即ち復活の理解がとんちんかんなマリアの心の向きであり、それをイエスに背を向けているマリアでヨハネは表現していると山岡は考えている。それ故、そのマリアが「振り向く」意義について、「イエスは彼女の見ている方向とは全く180度逆の方向から<マリア>と呼びかけられる」と言い、このイエスの呼びかけはマリアが心の向きを変えられる為に必要である事を山岡は明解にする。

つまり山岡の考えでは、イエスが「マリア」と呼びかけた時、マリアはイエスに背を向け、墓を見ていた事になる。山岡の見解に立つならば、マリアはもう一度つまり3回振り向かなければ墓を見ることはできない。だが聖書を文字通り読めば、<sup>29</sup>イエスがマリアと呼びかけた時は、イエスもマリアも向き合っているはずで、背後からの呼びかけでなく、対面しての呼びかけである。

聖書が表現する「振り向く」という言葉は、マリアの体の向きという物理的問題ではなく、あくまでも心の向きが象徴的に語られる言葉として受けとめる山岡の見解は、意義深い。更に山岡は「彼女が見ていた墓穴、つまりこれは死者の世界、死の支配領域であるが、イエスがこれとは正反対の命の領域、神の支配からマリアを呼びかけておられるのである。従ってマリアが180度視線を回転し、振り向いたところに、イエスは現れたのである」<sup>30</sup>と洞察鋭く述べる。しかし繰り返しになるが、マリアはイエスに名前を呼ばれてから2回目の振り向く行動をとり、その時墓を見る事になるのである。山岡の見解は魅力的だが、振り向く行為が2回である事の解明にはなっていない。山岡にとり重要なのは「振り向く」という行動自体であって、回数は問題ではない事がわかる。

・スローヤン<sup>32</sup> (1992年)

マリアについて「イエスを見るが、イエスが自分自身を示すまではイエスを『見て』いない、すなわち信仰の眼をもって見てはいない」と言い、「マリアは最初にイエスの声を聞いてから、イエスを認める(17節)前に、イエスが特別に自分自身を示す事(『マリア』という呼びかけ)が必要なのである」<sup>34</sup>と記す。スローヤンは、ここでのヨハネの眼目はイエスの声であると捉えており、それを聞き分ける羊としてのマリアが描かれていると考える。故にマリアの立ち位置や振り向く行動への関心は見受けられない。

・原野和男<sup>35</sup> (1994 年)

原野はヨハネの描く復活の記事は、事実や客観性に重点があるのではなく、その「意味」を表現しようとしているので、行動を表す言葉は象徴的意味を持っていると指摘する。そこでイエス顕現を理解する為にはマリアが「振り返る」姿をとる必要があり、それは「単に体の姿勢の問題であるよりも、内的な方向性の問題である。墓からイエスへと視線を転換する時、死から命への方向性の転換が起こる。」<sup>36</sup>と、心の有り様の象徴であると述べている。故にイエスの呼びかけが更にマリアに振り返りを促し、「すがりついてはいけない」とのイエスの言葉は、「イエスにすがりついて生きる姿勢そのものをくつがえし、克服して行く事を問うている。イエスに固着していくことは、イエスにぶらさがって生きる事ではなく、このイエスの突き放しに向き合わされながら、立ち上がらされて行く事である。(中略) 振り返る事なしにイエスに出会おうとしたり、あらゆるものにしがみついたままで甦りの命に与ろうとする都合の良さが、我々にないか。」<sup>37</sup>とまとめる原野にとって、マリアの「振り向く」は、単なる体の動作ではなく、復活のキリストに出会い、従う者の生き方としての「振り返り」という心の有り様を示すものであり、これがなければキリストに従えない程の大きな意味のある言葉と言える。しかしここでも振り向くが 2 回である事の意味は明らかにされないままである。

・レイモンド・E・ブラウン<sup>38</sup> (1997 年)

ブラウンは振り返ったマリアについては言及しない。天使とイエスがマリアにする質問が同

じである事に着目し、マリアがイエスの体、遺体を「どれほど心配していたかの表現」<sup>39</sup>であると優しさを込めていいつつ、神の介入が見えない程の涙による視野の曇りがマリアにあるのは、地上のイエスへ執着や未練があるからと捉えている。故に目が開かれ、マリアがイエスを認めるのは、イエスが彼女を名前と呼ぶ時だと言い、ブラウンは視覚や振る舞いではなく、即ちヨハネが大事に考えている「見る」だけではなく、「聴く」という行為にもヨハネの主眼がある事を示す。そして主の復活を見、主の昇天を聴いた者として私の兄弟たちに言いなさいと主から命じられた者として、更に主を信じた者であるだけでなく、主を告げ知らせる者になったマリアをブラウンはここに見いだし、マリアは使徒の役割を担ったと解釈している。しかし同時にブラウンは福音書記者ヨハネが使徒という言葉をほとんど使わないとも指摘する<sup>40</sup>。つまり、マリアは主のご復活の証言者として弟子であり、弟子から使徒になったとまでは言わないが、ブラウンはマリアを使徒とみなしているとも考えられる。

・シスター速水弥生 (聖心会裾野修道院 2000 年)<sup>41</sup>

この 2 回の振り返りは、2 回にこそ大きな意味がある。この意味は「乳離れ」<sup>42</sup>である。これはどんな註解書や神学書にも未だ見た事なく、まさに黙想の深さの中から出て来た傾聴すべき見解である。

・ルドルフ・ブルトマン<sup>43</sup> (2005 年)

ブルトマンは本文ではなく注において 16 節の「振り向く」<sup>44</sup>は 17 節の「私をつかむな」で

わかるようにイエスに対するマリアの突然の激しい動きの表現であり、16節と14節の振り向く<sup>45</sup>の動詞は競合して、15節の言葉でマリアは既にイエスの方を向いていたはずと理解している。<sup>46</sup>更にブルトマンは、イエスとマリアの体の位置関係よりも、イエスを認識できないマリアがイエスと気づいた、イエスが直接語りかけて名前を呼ぶという、羊飼いと羊の関係に見られる出会いに関心の比重がある。<sup>47</sup>

・市川喜一<sup>48</sup> (2008年)

『彼女は振り向いて』とありますが、マリアはすでに振り向いています(14節)。墓の中をかがんでのぞいていたマリアは、振り向いて後ろに立つ人物を園丁だと思って語りかけています。ここで再び『振り向いて』と言われているのは、一回の動作のときに起こった内面のドラマを生き生きと表現するために、繰り返されたものと考えられます。マリアは振り向いて、自分の名を呼んだ方に、思わず『ラッパーニ!』と呼びます。<sup>49</sup>と注解している。市川は2回という回数を遵守するが、マリアの2回目の振り向いたという記述の意味を実際に起こった体の動きとしてではなく、最初に振り向いた時のマリアの心の動きの表現と受け止めている。

・伊吹雄<sup>50</sup> (2008年)

伊吹はマリアの振り向くに関する14節について「彼女突然後ろを振り返る。それがなぜかは書かれていないが、これまでマリアは墓の方を向いて立っていたはずである。マリアはそこにイエスが立っているのを見るがそれと気づかない。復活したイエスは地上の目ではすぐそれ

とわからない。<sup>51</sup>」と記す。マリアが墓を向いていた姿勢から後ろを振り返る事を多くの註解書は書かないが、伊吹はそこをはっきりと書く。更に16節については「この呼びかけでマリアはイエスを認める。マリアは超越に向けて覚醒する。振り返る(straphein)という言葉がここで再び用いられている。しかしマリアは既に振り返っている(14節)。14節のそれが再び強調して取り上げられたのであろうか。すなわち声は後ろから聞こえたということである。この意味は“she recognized him”ということなのだろうか。(中略)そこに愛と希望に満ちた空間が全く新しく開かれるのである。マリアの感動についてはこの返答の答え以外には何も描かれていない。<sup>52</sup>」とある。「マリアは既に振り返っている」という指摘をし、呼びかけの声にイエスと気づいたマリアを超越に向けて覚醒したマリアと掴みながら、その後起こる2回目の振り返りの意味を語らず、「イエスの声は後ろから聞こえた」と書く伊吹にとり、2回目の振り返りが体の動きとは考えていない事がわかる。むしろイエスの声で覚醒したマリアの存在とその感動を表す表現として「振り向く」が用いられたと取っていると考えられる。洞察鋭い考えだが、何故伊吹はイエスの声は後ろから聞こえた<sup>53</sup>と考えるのか、その根拠が明白でない。

・ゲイル・R・オデイ<sup>54</sup> (NIB新約聖書注解2009年)

20:16の注解において「認識の瞬間の簡潔な語り口はその瞬間を強く心打つものになっている。マリアは前にも一度イエスの方を振り返った(14節)のだが、今度はイエスに名前を呼ばれたことによって彼だと悟ることが出来た。

イエスとマリアのこのやりとりは良き羊飼いと  
してのイエスを表している。嘆きと悲しみが喜  
びに変わるという約束はイエスの存在と言葉に  
よって成就した (16:20-22)<sup>55</sup>』と述べる。  
オデイも市川同様マリアの振り返りの行動を 2  
回ととり、体の動きとは考えず、自分の名前を  
呼ばれて本当にイエスだと納得した気づき、そ  
のマリアの心の悟りを表す言葉として受け止め  
ている。まさに信じないものから信じる者へ、  
悲嘆と絶望から喜びの頂点に変わるくらいの  
180 度心の向きが変わった有り様を表す表現と  
言う事になろう。

・田川建三<sup>56</sup> (2013 年)

田川は「振り向く」については、歯牙にもか  
けない。

・R・カイザー<sup>57</sup> (2018 年)

カイザーは、ヨハネ福音書の女性たちと言う  
補遺の中で、ヨハネ福音書は 1 世紀のキリスト  
教文献の型にはまらない一匹狼の孤高性があり、  
女性についてもその型破りな描き方をして  
いると指摘する。マグダラのマリアに関しては、  
レイモンド・E・ブラウンを引いて「最初の使  
徒—復活のキリストを証言し、イエスの復活を  
告げ知らせるため遣わされる者—である。事実、  
彼女は使徒たちへの使徒である。」<sup>58</sup>』と述べる。  
パウロでさえ使徒である事を否定され、その証  
明を書簡の中で繰り返し主張する必要があった  
時代の中で、カイザーはブラウンの考えを支持  
し、ヨハネ福音書の描くマリアに、弟子である  
ことよりも使徒であるとする所にヨハネの特徴  
と独自性をみている。

### (3) アベンディクス的に (哲学者の場合)

・田辺保<sup>59</sup> (2002 年)

聖書の中の人物や伝承、「レゲンダ」に登場  
する人々を、それは私だという思い<sup>60</sup>で受け止  
めている田辺は、著書の中でマグダラのマリア  
を取り上げ<sup>61</sup>、ご復活の場面でのマリアがイエ  
スに気づく契機となるイエスの呼びかけを「背  
後から呼びかける声<sup>62</sup>」と理解している。田辺  
の解釈もまたイエスとマリアはこの呼びかけで  
向き合う位置関係に立つというものである。

・ジャック・リュック・ナンシー<sup>63</sup> (2006 年)

美術から「ノリ・メ・タンゲレ」の意味を身  
体性や視覚や象徴性の視点から解き明かそうと  
する著書は、「この二人 (ヨハネとトマス) の  
間であって、マグダラのマリアは、その明察な  
きく視>がイエスの声によって向きを変える者  
である」と記す。即ち見て信じたヨハネと触  
れなければ信じないというトマスの物語の間の  
マグダラのマリアは視覚でもなく身体性でもな  
く、イエスの声を聴いて向きを変える者、信じ  
る者になる事が描かれているとする。コンテキ  
ストに着目して読み解こうとし、且つ振り向く  
回数には争点がある事に気づいているナンシー  
は回数の問題には踏み込まない。

### (4) 聖書学的理解のまとめ

以上専門家の意見は、マリアの「振り向く」  
行動について、さほど注目しないか、聖書の記  
述通り 2 回と考えて解釈することは少ない事が  
わかる。2 回と考えて解釈する場合は、イエス  
とマリアの位置関係にはこだわらず、イエスに  
出会う為の心のあり方としての方向転換が強調

されているとの解釈だった。また、イエスが声をかけるのはマリアの後ろからという理解が多く、マリアがイエスに気づいて振り返り、マリアとイエスが相対している場面として理解しようとする意図が働き、聖書に書かれていない3回目の振り返りの行動があった事になっている解釈が多かった。復活を理解する事は人間の知識や常識を超えている事であり、イエスの体へのマリアのこだわりは、この世の物への執着や未練であり、悲しみや絶望に留まる生き方の象徴であるから、それを捨てるか離れない限り、イエスの復活と出会えないという理解が前提にあるのではないだろうか。それは既に答えないし前提があり、それに合わせて聖書を読もうとする姿勢ではないだろうか。イエスの復活に出会う為には、生き方の変化つまり180度の転換が求められているという前提があるという事である。

しかし、復活のキリストに出会う為には正面からしか出会えないのだろうか。否である。同じ方向を見る事だって出会う事になるのではないか。2回の意味は「乳離れ」と教示して下さった霊想指導者の言葉に触発され、マリアの2回の振り返りの意味を子どもたちの発想から教えられてみたいと思う。

### 3 2018年度授業実践報告<sup>65</sup>

「ご復活物語から考える『弟子から使徒へ』の意味」

#### (1) 振り返るマリア

ご復活の朝、マグダラのアリアは、主イエスのいない空のお墓を前にして立って泣いている(11節)。二人の天使はマリアに「何故泣いて

いるのか」と尋ねる(13節)。マリアは「私の主が取り去られた」と言いながら、『後ろを振り向く』(14節)。この時、マリアはお墓を背にして、主イエスと向き合うことになる。主イエスが自分の前にいるのを見ながら、マリアはその人が主イエスだと気づかない。主イエスは混乱しているマリアに「婦人よ、何故泣いているのか。誰を捜しているのか」と声をかける(15節)。その声の主が誰だか、マリアはまだ気づかない。むしろお墓の管理人だと思い込み、あの方を私が引き取るとまで訴える(15節)。

#### (2) 再び振り返るマリア

その時、主イエスは「マリア」と呼びかける(16節)。名前を呼ばれたマリアは、「振り向いて」「ラボニ(先生)」と答える(16節)。この時マリアは、どこをみているのか。主イエスとの立ち位置はどうなっているのか。この2度目の「振り向く」が不思議である。なぜならマリアと名前を呼ばれた今、最愛の主イエスは自分の目の前に立っている。主イエスと目と目を合わせて正面から主イエスを見つめている。ご復活されたキリストをマリアは直視している。人間の常識からしたらあり得ない事に遭遇している。それなのにマリアは16節で2度目の「振り向く」行動をとる。

何故、歓喜の中にあるはずのマリアは主イエスに正面からしがみつかなかったのか。何故、向き合っている主イエスを前にしながらわざわざ「振り向き」、自分の向きを変える記述を聖書はするのか。向きを変える必要があるとすればそれはどんな意味なのだろうか。「振り向いた」為、今アリアは、主イエスを自分の背

にして立つ事になり、マリアが見ているのは主イエスではなく、お墓ということになる。

### (3) 「主イエスは本当にお墓にいない？」

上述の説明をした後、主イエスを前にして何故「振り向いた」のかと質問した所、ある生徒は、今自分の名前を呼んだのは、本当にご復活された主イエスなのか、本当にお墓の中に主イエスははいないのか確かめる為にお墓の方を振り返ったと思う」という意見を述べた。合理的な考え方である。

この合理性は説得力がある。しかし、それなら尚の事もう一度「振り向いて」マリアはイエスと正面する姿勢に戻らなかったのか。つまり3度目の「振りむく」を何故聖書は記さないのか、疑問が残る。

故に3回でなく「2回」の「振り向く」の意味を考える必要が生じて来る。

### (4) イエスに呼ばれ、振り返ったマリアと主イエスが見ているもの

そこで次にマリアと主イエスは何をみているかを子どもたちに質問した。子どもたちは一斉に「お墓」「天使」と答える。これは主イエスもマリアも「同じもの」を見ていると言い換えられる。更に「まだある。イエス様はマリアを見ている。」との答えがあった。イエスとマリアが同じ方向で同じものを見ていて、マリアの後ろにイエスがいるならば、この意見は確かである。この時、子どもたちは、主イエスはマリアを見つめながら、マリアと「同じもの」を見ていると言う事に気づく。マリアは主イエスに見守られながら、主イエスと同じものを見つ

めているという事を子どもたちは発見するである。そこから考えると主イエスと同じ方向に立つ為に、マリアの「振り向く」行動は3回ではなく2回である必要があったと言えるのではないだろうか。

ここで注目したい意見は、「イエス様はマリアを見ている」という答である。いつも驚くことだが、彼らは「イエス様は」とイエスを主語にして考える発想をごく自然に持っている。これを「マリアはイエス様に見守られているということだね」と言い換え、確認する時はじめて、ただの物語から自分とマリアをイエスの前で同一線上に捉える発想が動き始める。自分たちもまたイエスに見守られてあることを、授業でというよりは、<sup>66</sup>日々の礼拝の積み重ねの中で彼らは確認して行くことになる。

### (5) 「同じものを見る」という事の意味

主イエスはマリアに「すがりついてはいけないう」と言う。ご復活のキリストに出会った者は、主イエスを見つめ、主イエスに寄りかかり、しがみついて生きる生き方を変えられる。主イエスが見つめているものを見つめる生き方へと変えられる。主イエスと同じものを見つめる生き方である。これこそが『弟子から使徒へ』変えられる生き方。『弟子』は主イエスの教えを受け、主イエスを必要とする。『使徒』はギリシア語でアポストロスといい、派遣されたものと言う意味がある。言い換えれば、使徒も主イエスを必要とするが、受けた教えを伝えるために主イエスから送り出された者が『使徒』である。

#### (6) 『弟子』と『使徒』の違いを考える

2018年度の3年生の子どもたちは、辞書をひくのが楽しくて仕方がない。『弟子』という言葉は知っているが、『使徒』は今回の授業で始めて知った言葉になる。自分の持っている辞書で『使徒』を早速調べはじめる。ところが、「使徒」はあるけれど『使徒』はでてこないところ。色々な辞書にあたり、『新明解』に見えする。聖書の後ろの用語集を調べたりもする。そこで『日本国語大辞典』を実際に見せ、調べた。そこから、『使徒』は神様の使命を果たす為に、神様やキリストが選んだ人であり、聖霊が働く人である事が分かった。しかし大切なのは、辞書の意味を知る事ではなくて、聖書が伝えようとする意味を探る事である。子どもたちに考えてもらうことにした。以下に子どもたちの意見を紹介したい。

#### (7) 「使徒」についての子どもたちの意見

①イエス様が天に帰って、この世界にいないから、イエス様に代わってイエス様から教えてもらった事を伝える人が使徒。②弟子とイエス様の関係は、イエス様が偉いという関係。使徒とイエス様の関係は仲間って言う関係。③イエス様が消えちゃうから、イエス様の言い伝えを教える仲間が使徒。④イエス様とはなれていない関係が使徒。⑤弟子はイエス様と向き合っただけの関係。使徒はイエス様に憧れている関係。⑥使徒は、イエス様が見ているものと同じ方向から見る関係。⑦弟子はイエス様と目と目が合う関係。嬉しい関係。⑧弟子というのは、マリアの話から考えるとまだイエス様だとわからない関係。でも使徒は、(イエ

ス様を目で見えていなくても)心がつながってイエス様だとわかる関係。⑨イエス様と向き合う弟子の時は、教えを受ける時。振り向いてお墓を見た時、イエス様と弟子の心が一致して、一緒にお墓を見て、そこからイエス様と共に世界に伝えるのが使徒。⑩弟子は学ぶ人。使徒は神さまから遣わされて学んだ事を実行する人。

これらの意見から考えられる事は、弟子は実際の主イエスを実感できる関係にあるという事である。そして主イエスの昇天後、主イエスを目の当たりに出来なくなってから、主イエス様と心を一致させ、主イエスの教えを自分たちが生きて伝える者が使徒であると考えられる。

実にマグダラのマリアに見られるご復活の出来事の中に、既に弟子から使徒への変化が準備されていた事を教えられる。<sup>67</sup>

### 4 2019年度授業実践報告<sup>68</sup>

2018年度の授業をベースに2019年度の授業を展開した。その一部を以下にまとめる。

#### (1) 感動で自分が変えられる時<sup>69</sup>

感動する時、人は変えられる。その確かさは聖書が証明済みである。ご復活のキリストに出会った人々である。ご復活のキリストに出会った人々は、自分の努力ではなくて、神さまの力によって新しい生き方、心へと変えられていく。子どもたちは、ご復活のキリストに出会った人に起こる変化を次のように表現した。①聖霊によって心が動かされる。②心が満たされる。③悲しみから解放される。④罪が赦される。⑤命が救われる。⑥心が清められる。⑦絶望が喜びに変えられる。⑧心が安らかにされる。

子どもたちの捉えた豊かさは、ご復活のキリストに出会う喜びの豊かさを表す。

## (2) マリアの変化について

ご復活のキリストに出会ったマリアの変化について子どもたちは次のように気づいた。

「イエス様に気づかないマリアは自分を見て欲しい、助けて欲しい人。」「イエス様に会いたい人」「自分の事しか考えていない自分勝手なマリアがイエスさまや他の人の事を考えられる優しい人になった。」「ご復活のキリストに気づいてからは、イエス様をみんなに伝える人になった。」「それってマリアがみんなの為に生きる人になったってことでしょう。」と話合いの中で出て来た。まとめをした際にはこれらの意見を受け、「イエス様について、自分だけのイエス様からみんなのイエス様だとマリアは気がついたと思う」との意見が出された。

## (3) 使徒としてのキリストとの一致

イエス様と同じ方向を見ているマリアやトマスのお話からご復活のキリストに出会う事はイエス様と一つになる、一致するという事を確認した。その中で神さまと一つになり一致するとはどういう事なのかを子どもたちに質問した。<sup>70</sup>すると子どもから手が挙がり、「簡単なことだよ。」というのである。続けて「神さまと一緒に。だから大丈夫って言うイエス様からのメッセージだと思う」と答えた。<sup>71</sup>

## 5 結語

子どもたちは、聖書の記述を忠実に読み、マリアの「振り向く」行動を2回と受け止め、復

活のキリストとマリアは同じ方向を見ていると気づいた。まずここに子どもたちの特徴が見られた。

即ち、聖書学の専門家たちはイエスとマリアの位置関係を「向き合う」と捉えていたが、子どもたちは、復活したイエス（キリスト）に出会い、彼と気づいたマリアは、「イエスに見守られて」イエスと「同じ方向を見つめた」と掴んだ。更に復活されたイエス（キリスト）を伝える者として、イエスから派遣された者になったとの考えに至った。その上で更に、イエス（キリスト）と気づいたマリアは、もはや復活のキリストを自分一人の先生としてではなく、みんなのイエス（キリスト）である事に気づいたと、マリアの変化を仲間の意見を聴きながら、自分たちの言葉で発見した。これらはどんな神学者にも見いだせないマリアの姿、イエスの姿である。しかも最後には、同じ方向を見て派遣される事は、神様との一致であり、それは、「神様と一緒に、だから大丈夫というメッセージだ」との結論を子どもたちは導き出した。

大人のように復活とはという前提に合わせて、自分が理解したいイエスをこねくり回して考える事を彼らはしない。子どもたちは、頭だけでわかろうとする事なく、感性や霊性、全身全霊で聖書が語るイエスと出会う。

教師は不思議を不思議と提示しただけで、後は彼らが仲間の意見を聞き、それを参考にし、自分の考えをまとめたのである。彼らの特徴は、そのまま聖書を受け取りそこから考える所にある。そして汲み上げたメッセージは、単純素朴であり、直感的に神学的であり、多様である。また聴いた者が励まされ、慰められる力の

ある、人を元気づけ生きる力を与えてくれるものである。イエス・キリストはいつも自分たちと共にいてくださる事を生活の中でごく自然に受け取っている彼らの信頼が、大人には見出せないイエス・キリストと出会う結果となったと思われる。

教師が伝えたい事を引っ込め、教えようとする思いを捨て彼らに委ねた時、彼らは自由に何の制約もなく、何の知識や前提も必要とせず、遊ぶように聖書が語ろうとするイエス・キリストに素直にダイレクトに出会うのである。教師がわからない事を問いかけ生徒に教えを乞う時、教師からの説得ではなく、生徒自身が自分の経験と言葉で、教師や神学者の思いを越えた子ども自身の多様なキリストの発見・出会いが起こる事を今回の出来事は証明していると確信する。

#### 参考文献

##### 聖書

・ Nestle - Aland. Novum Testamentum Graece. Deutsche Bibelgesellschaft. Stuttgart. 1993

##### 辞書

- ・ 岩隈直 増補改訂 新約ギリシャ語辞典 山本書店 1982年
- ・ 織田昭 新約聖書ギリシア語小辞典 教文館 2002年
- ・ 新井献他監修 ギリシア語 新約聖書釈義辞典 教文館 1995年
- ・ Theological Dictionary of The New Testament. Ed. Gerhard Kittel & Gerhard Fried-

rich. Trans. G.W. Bromiley. et. al. volume VII Michign: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1978.

##### 論文

- ・ 佐々木正、2019年、「神の國は斯くのごとき者の國なり—公立小学校教員としての歩み(その3)—『キリスト教教育研究36号』」、立教大学キリスト教教育研究所

##### 著書

- ・ 市川喜一、2008年、『対話篇・永遠の命—ヨハネ福音書講解II』、天旅出版社
- ・ 伊吹雄、2009年、『ヨハネ福音書注解』、知泉書館
- ・ 大田堯、2014年、『教育とは何か』、岩波新書。
- ・ 岡田温司、2005年、『マグダラのマリア エロスとアガペーの聖女』、中央公論新社。
- ・ オデイ, G.R. 2009年、『NIB新約聖書注解5ヨハネ福音書』(田中和恵・田中直美訳)、ATD・NTD聖書註解刊行会。
- ・ 黒崎幸吉、1934年(昭和9年)、『注解新約聖書ヨハネ伝』、日英堂書店。
- ・ カイザー, R. 2018年『ヨハネ福音書入門 その象徴と孤高の思想』(前川裕訳)、教文館。
- ・ ジャック・リュック・ナンシー、2006年、『私に触れるな』(荻野厚志訳)、未来社。
- ・ シュラッター、1984年、『シュラッター・新約聖書講解4ヨハネによる福音書』(蓮見和男訳)、新教出版社。
- ・ シュルツ, ジークフリート、1986年、『NTD新約聖書註解4ヨハネによる福音書』(松田伊作訳)、ATD・NTD聖書註解刊行会。

- ・スローヤン, G.S. 1992 年、『現代聖書註解 ヨハネによる福音書』（鈴木脩平訳）、日本基督教団出版局。
- ・『説教者のための聖書講解 釈義から説教へ ヨハネによる福音書』、1994 年、日本基督教団出版局。
- ・高橋・B. シュナイダー監修、川島貞雄、橋本滋男、堀田雄康編集、1991 年『新共同訳聖書註解 I』、日本基督教団出版局。
- ・高橋三郎、1990、『ヨハネ伝講義下』、待晨堂。
- ・田川建三、2013 年、『新約聖書 訳と註 第 5 巻 ヨハネ福音書』、作品社
- ・田辺保、2002 年、『フランスにやって来たキリストの弟子たち—「レゲンダ」をはぐくんだ中世民衆の心性—』、教文館。
- ・『聖書』塚本虎二訳、岩波書店
- ・パークレー, ウイリアム、1983 年、『聖書註解シリーズ 6 ヨハネ福音書下』（The Daily Study Bible）柳生望訳、ヨルダン社。
- ・バルバロ, フェデリコ、1967 年、『新約聖書註解集 4 聖ヨハネ福音書註解』、ドン・ボスコ社。
- ・ブラウン, レイモンド, E. 2008 年、『ヨハネ共同体の神学とその史の変遷』（湯浅俊治監訳・田中昇訳）、教友社。
- ・ブラウン, レイモンド, E. 2008 年、『キリストの復活 福音書は何を語るか』（佐久間勤訳）、女子パウロ会
- ・ブラウン, レイモンド, E. 2008 年、『解説「ヨハネ福音書・ヨハネの手紙」』（湯浅俊治監訳・田中昇訳）、教友社。
- ・ブルトマン, ルドルフ、2005 年、『ヨハネの福音書』（杉原助訳）、日本キリスト教団出版局。
- ・星野道夫、2018 年、『旅をする木』、文春文庫。
- ・Sloyan, Gerard Stephen. 1988 Interpretation. Atlanta: John Knox Press.

---

注

- <sup>1</sup> 大田堯、2014 年、『教育とは何か』、岩波新書 p.114 引用
- <sup>2</sup> 更に「教育という言葉について、私たちが長年とらえてきた観念は、何かを相手に教えること（説得）がまず先行しています。そして、相手の内面から“わきまえる”力、分別を引き出し、育てることが、教えることに従属してしまう傾向があります。ここがまさに問題なのであって、『教』と『育』とを逆転させるような発想に立ちかえることが必要であると思います。…中略…教えること自体が目的となると、それは一方的

に教えるものに対して同化を求めるだけにおわりがちです」（同上 p.117 引用）と記している。この言葉は、同意ならまだしも、評価を盾に同化と強制を押しつけてきた事にさえ無自覚な自分の授業を振り返らされる言葉である。

- <sup>3</sup> 佐々木正、「神の國は斯くのごとき者の國なり—公立小学校教員としての歩み（その 3）—」『キリスト教教育研究 36 号』、立教大学キリスト教教育研究所 2019 年 3 月 p.14 引用
- <sup>4</sup> “noli me tangere” 日本語は「我に触れるな」ヨハネ 20 章 15 節の言葉による絵画のタイトル。例えばフラ・アンジェリコの絵画は、

マリアは墓を背にしてイエスと向き合っている。マリアが墓を背にしている事も伝統的聖書理解の一つの特徴といえる。イエスの顔はマリアを見つめつつ、体は微妙にマリアに背を向け、マリアや墓から立ち去ろうとしている構図である。15世紀の描かれる絵の特徴なのか、イエスの体がよじれている。デューラーやリーメン・シュナイダーは体も顔も向き合っている。

<sup>5</sup> 荒井献他監修、1995年、『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅲ』、教文館。p.320 (strephe)の項。この言葉は向ける、振り返る、振り向く、方向を変える、悔い改める、心を入れかえるという意味がある。

<sup>6</sup> 同上 p.320 引用

<sup>7</sup> 岩隈直、1982年、『増補改訂 新約ギリシャ語辞典』、山本書店。p. 438 引用 この間にとは14節から16節のマリアとイエスの会話中の事を指している。その会話の最中にマリアが墓の方に姿勢を変えたのかという意味。辞書の用語の説明でありながら、引用箇所への注を入れていることも異例である。しかもここではあえて「のか」と疑問符である所に注目したい。イエスとマリアが向き合っていると暗黙の了解で読んできている伝統的解釈に対して、原文に忠実に読む姿勢からの疑問、躊躇ともとれる思いが聞きとれる言葉使いになっている。

<sup>8</sup> 同上 p. 438 引用 他方キッテルの辞書は、14節と16節の振り向く言葉には緊張があるという。更にブラックについて以下のように述べる。Katzはブラックの見解を斥け Schwartzの見解を修正している。現

実的問題はないと6という注の中で述べている (Theological Dictionary of The New Testament. p.715)。

<sup>9</sup> 黒崎幸吉、『註解新約聖書ヨハネ伝』、日英堂書店、1934年 (昭和9年)。

<sup>10</sup> 同上 p.209 引用

<sup>11</sup> バルバロ、フェデリコ、1967年『新約聖書注解集4 聖ヨハネ福音書注解』、ドン・ボスコ社

<sup>12</sup> 同上 p.341 引用

<sup>13</sup> 同上 p.342 引用

<sup>14</sup> "apostola apostolorum"の表現はブラウン、R.E. 2008年、『ヨハネ共同体の神学とその史の変遷』(湯浅俊治監訳、田中昇訳)、教友社のp.291の注336参照。これを見ると、この言葉、マリアへの理解はバルバロ神父のオリジナルではないこともわかる。マグダラのマリアに使われた"apostle"はラバナス・マウルスが著し、9世紀に話題になった彼女の伝記に頻繁に出て来るというのである。しかも西方教会の伝承においてマリアが既に「使徒たちへの使徒」みなされていたが故に祝日で信仰宣言が唱えられる聖母マリアを除いた唯一の女性だと p.229 で記している。

<sup>15</sup> バークレー、ウィリアム、1983年、『聖書注解シリーズ6 ヨハネ福音書下』、The Daily Study Bible、(柳生望訳)、ヨルダン社。

<sup>16</sup> 同上 p.355 引用

<sup>17</sup> 同上 p.356 引用

<sup>18</sup> 同上 p.355 引用

<sup>19</sup> 同上 p.354 ~ 356

<sup>20</sup> シュラッター、1984年、『シュラッター・

- 新約聖書講解 4 ヨハネによる福音書』(蓮見和男訳)、新教出版社。p.328 ～ 330
- <sup>21</sup> シュルツ, ジークフリート、1986 年、『NTD 新約聖書註解 4 ヨハネによる福音書』(松田伊作訳)、ATD・NTD 聖書註解刊行会。p.465 ～ 467
- <sup>22</sup> 高橋三郎、1990 年、『ヨハネ伝講義下』、待晨堂。
- <sup>23</sup> 同上 p.481 引用
- <sup>24</sup> 高橋・シュナイダー、B. 監修 川島貞雄 橋本滋男 堀田雄康編集、1991 年、『新共同訳聖書註解 I』、日本基督教団出版局。p.529 ～ 531 ヨハネ福音書 20 章は山岡健著
- <sup>25</sup> 同上 p.529 上段引用
- <sup>26</sup> 同上 p.529 下段引用
- <sup>27</sup> 同上 p.529 下段引用
- <sup>28</sup> 同上 p.529 下段引用
- <sup>29</sup> 振り向く行為が聖書の中に記されている回数「2 回」である。
- <sup>30</sup> 前掲書 p.530 引用
- <sup>31</sup> 前掲書 p.529 ～ 531 ヨハネ福音書 20 章は山岡健著
- <sup>32</sup> スローヤン、G.S. 1992 年、『現代聖書註解 ヨハネによる福音書』(鈴木脩平訳)、日本基督教団出版局。p.387 ～ 390 Sloyan, Gerard Stephen. Interpretation. Atlanta: John Knox Press. 1988 p.220～223
- <sup>33</sup> 同上 p.386 引用 ibid.p.220
- <sup>34</sup> 同上 p.386 引用 ibid.p.220
- <sup>35</sup> 『説教者のための聖書講解 釈義から説教へヨハネによる福音書』、1994 年、日本基督教団出版局。(20:11 ～ 18 は原野和男著) p.471～476
- <sup>36</sup> 同上 p.474 引用
- <sup>37</sup> 同上 p.476 引用 振り返る事は心のあり方であり、自分の持っている目に見える物、見えない物含め手放したくない物にしがみつ、そこに留まる事は赦されない生き方であると考ええる点は、山岡の見解に共通している。
- <sup>38</sup> ブラウン、レイモンド、E. 1997 年、『キリストの復活 福音書は何を語るか』(佐久間勤訳)、女子パウロ会。p.113～117
- <sup>39</sup> 同上 p.114 引用
- <sup>40</sup> 同上 p.113～117 レイモンド・E・ブラウンの実に大胆とも言える見解に驚嘆する。なぜならブラウンは女性聖職者を認めないカトリックの神父だからである。しかし使徒になったと言わない所に慎重さを思う。更にブラウン神父の 2008 年、『ヨハネ共同体の神学とその史の変遷』(湯浅俊治監訳 田中昇訳)、教友社。p.102 で「第 4 福音書は『使徒』という身分には何の関心も示さず、『弟子』を最も重要なキリスト者の身分としている」と記し、ヨハネの中で使徒は重要な概念ではないという事が示されている。マリアを使徒以上の弟子と位置づける見解はかなりラディカルという事になる。
- <sup>41</sup> 2000 年 8 月聖心会修道院の 8 日間の黙想会に参加した際の霊想指導者。
- <sup>42</sup> この黙想会は完全沈黙で、一日一時間だけ霊想指導者と話す時間がある。霊想指導の時間にその日に与えられた聖書についての感想を聞かれる。この日ヨハネ 20:11 ～ 18 が黙想の御言葉として与えられた。「振り向く」マリアはイエスにすがりつく生き

方を変えられるという事であり、そこに感銘を受けた事を伝えると、プロテスタントの人は聖書をよく読んでいて感心して下さった。そこでシスターが教えてくださった事が「乳離れ」であった。かつて50年以上も前、シスターが終生誓願する前に50日間の完全沈黙の黙想会（たった一日だけ仲間たちとピクニックにいける日があるらしい）がアメリカであり、その時、霊想指導の神父さまが教えてくださった見解であるという。シスターにとりもう何十年も前になるが、忘れられない話しであったというのである。自分に都合のよい解釈を引き出す意図で聖書の記述を勝手に3回マリアが振り向いた事にして聖書を読んではいけない事を示された。それと共に聖書をこんなにも忠実に読むのかと驚きのうちに教えられた出来事であった。「乳離れ」の意味についての詳細な説明はされず、黙想の課題として与えられたままである。

<sup>43</sup> ブルトマン, ルドルフ, 2005年、『ヨハネの福音書』(杉原助訳)、日本キリスト教団出版局。p.538-545

<sup>44</sup> 16節は strapheisa (ストウラフェイサ) が用いられている。時制は第二不定過去分詞、受動態、女性、単数、主格。

<sup>45</sup> 14節は estraphe (エストウラフェー) が用いられている。時制は第二不定過去、受動態、直接法、三人称、単数。

<sup>46</sup> 前掲書 p.993 以下は注338による。よって文献批判的に12～14節を削除して考えて問題を解消すべきではないとも言っている。また「ブラックは16節の振り向く(ス

トウラフェイサ) は写本 syr で『彼女は彼を認めた』と訳されている、アラム語本文の誤解に基づく、と推定している。』(注338引用) という。

<sup>47</sup> 同上 p.542

<sup>48</sup> 市川喜一、2008年、『対話篇・永遠の命—ヨハネ福音書講解Ⅱ』、天旅出版社。p.224-231

<sup>49</sup> 同上 p.228～229引用

<sup>50</sup> 伊吹雄、2009年、『ヨハネ福音書注解』、知泉書館。p.406-413

<sup>51</sup> 同上 p.407引用

<sup>52</sup> 同上 p.409引用。伊吹は Schlatter や Becker や Barrett らの注解書を参考にしている。

<sup>53</sup> ここに全面的に賛同できないもどかしさがある。

<sup>54</sup> オデイ, ゲイル R.2009年、『NIB 新約聖書注解5 ヨハネ福音書』(田中和恵・田中直美訳)、ATD・NTD 聖書注解刊行会。p.474-482

<sup>55</sup> 同上 p.478引用

<sup>56</sup> 田川建三、2013年、『新約聖書 訳と註解第5巻 ヨハネ福音書』作品社

<sup>57</sup> カイザー R.2018年、『ヨハネ福音書入門 その象徴と孤高の思想』(前川裕訳)、教文館。p.320-335

<sup>58</sup> 同上 p.330引用

<sup>59</sup> 田辺保、2002年、『フランスにやって来たキリストの弟子たち—「レゲンダ」をはぐくんだ中世民衆の心性—』、教文館。この著書は「レゲンダ」を生み、今にその伝承を伝えている土地を实际訪れ、「レゲンダ」が編まれてきたその土地の空気、歴史、靈性を記している。

- <sup>60</sup> この思いは、あとがきでも書かれているが、「単に知識でなく自分の感性のすべてをもあげて共感しながらわかって行く」(同上 p.291 引用) そういう姿勢であろうかと思われる。理性や悟性、感性を越えた靈性による理解とも言い得るのではないだろうか。
- <sup>61</sup> 同上 p.122~178
- <sup>62</sup> 同上 p.170 引用
- <sup>63</sup> ジャック・リュック・ナンシー、2006 年、『私に触れるな』(荻野厚志訳)、未来社。
- <sup>64</sup> 同上 p.43 引用。更にここでの注でナンシーは振り向くについて「微妙な解釈の争点がある。(ギリシア語やシリア語の) 幾つかのヴァージョンによって、マグダラのマリアがただ一度振り返るか、二度振り返るか、まぢまぢなのだ。」(同上 p.88 引用) と記している。
- <sup>65</sup> 立教小学校 3 年生 (69 回生) の聖書の授業
- <sup>66</sup> 授業は契機になるというのではなく、気づく材料の提供の一つでしかない。
- <sup>67</sup> 日本聖書神学校教授の今橋朗牧師は、2009 年の伊勢原教会 105 周年の礼拝の中で使徒言行録 16 章 6 節以下のマケドニアの幻を取り上げた際、次のように述べた。「マケドニアへ出発する時のパウロたちは、イエスを見つめて円を組む弟子から使徒への変化がここにはある」と解き明かされた。
- <sup>68</sup> 立教小学校 3 年生 (70 回生) の聖書の授業
- <sup>69</sup> 星野道夫、2018 年、『旅をする木』、文春文庫を紹介した授業の中で、以下の会話が展開された。「いつまでも見ていたいような、取って置きたいような星空や泣けてくるような夕陽を一人で見た時、大切な人にその美しさやその時の気持ちを伝える為にみんなならどうする？」この問いに小学 3 年生はこう答えた。「写真に撮る。」「絵を描く。」「言葉で伝える」「絵日記にする」と。そして最後に出た意見は「大切な人をそこに連れて行く。」思いがけない意見に仲間たちはへえ～と驚き、他にどんな答えがあるのか興味を持つ。「これは写真家の星野道夫さんが友人からされた質問。星野さんは本の中で、友人の言葉をこう記しています。『その人はこう言ったんだ。自分が変わってゆくことだって…その夕陽を見て、感動して、自分が変わってゆくことだと思うって』(同上 p.119 から引用)。」この言葉を聞いた、先に「大切な人を連れて行く」と答えた生徒は、「いい言葉だなあ。聖書みたいだあ。」と即答した。
- <sup>70</sup> 正直イエスとつながるのではなく、「キリストと一致する」という事が実感としても乏しく、その意味さえつかめていない自分は、子どもたちに教えを乞うた。
- <sup>71</sup> 小学校 3 年生の生徒のこの信頼に只々圧倒された。